

TOKYO PAPER

トーキョーペーパー

for Culture

フォーカルチャー

こんにちは。『TOKYO PAPER for Culture』は、東京文化発信プロジェクト（ブンプロ）が発行する、東京の文化を研究するためのフリーペーパーです。「文化は人の営みそのもの」という想いを携えながら、わたしたち編集部員は、“文化研究員”として、その研究成果を紙面上で発表しています。2020年東京オリンピック・パラリンピック開催決定という、半世紀ぶりの祝祭に向けて走り出した東京。『TOKYO PAPER for Culture』は、この壮大なテーマに対しても、地道な研究を重ねていきたいと思います！

Hello. This is the “TOKYO PAPER for Culture”, a free paper from the Tokyo Culture Creation Project that explores the culture of this vibrant city. Holding true to the belief that “culture is the work of humanity,” we editors work as “cultural researchers” to deliver the fruits of our cultural investigations in a handy, readable format. The “TOKYO PAPER for Culture” will also focus on the 2020 Tokyo Olympics and Paralympics—a historic undertaking already beginning to take shape. As Tokyo prepares for its first Olympic festivities in approximately 50 years, we'll delve into all the cultural dimensions that the upcoming celebration is now unlocking.

第三号／003

7年後の東京、わたしを見つめながら

ひびのこづえ（コスチューム・アーティスト）× 近藤良平（ダンサー／振付家）× 原田郁子（音楽家）

研究テーマ③：墨東を歩こう

東向島～曳舟～押上周辺のあれこれ

東京文化の新しい幕開け

2020年東京五輪開催決定

2020年、東京オリンピック・パラリンピック開催が決定。東京の文化を研究している私たちにとっては、格好の研究材料です。客員研究員の3人の目に映る、オリンピック模様。座談会はこの話題から始まりました。

近藤良平 (以下、近藤)：オリンピックのことは、2年前から現実的に意識し始めていましたね。それは国体 (第68回国民体育大会) の開会式式典演技の演出を担当することになったから。9月7日 (日本時間8日) に開催地が決定して、9月28日からは国体が始まります。だから、もしオリンピックが東京に決まったら、(国体の) 式典にはその演出を入れなくてははいけないし、これはちょっと大変だなと思っていました。実際決まって、やっぱり世の中は大騒ぎしましたね。その分、僕は冷静に受け止めながら、式典の準備をしました。でも、少しずつ気持ちも変わってきて。国体の参加選手には15歳以上18歳未満の少年枠があるんですけど、2020年を想像したときに、まさに彼らが現実的にオリンピックのトップバッターの世代になる。僕が40代から50代になると訳が違うから、これはとてつもないことだなって。オリンピックが決定したことで、国体も特別なムードに包まれましたし、今は東京に決まって良かったなあと、素直に嬉しいです。

ひびのこづえ (以下、ひびの)：私の場合、オリンピックというと、前回の東京オリンピックのことを思い出します。開催された直後に、家族で愛知から新宿に引っ越してきたんですよ。学校の同級生から「空に浮かんた五輪マークを見

たよ」「アベベ (アベベ・ビキラ) の応援に行ったよ」とか聞いて、オリンピックは現実だったってそこで初めて実感して。

近藤：面白い。それはかなり昔の話ですね。

ひびの：そう、かなり昔 (笑)。だからその当時、私は日本にいながらオリンピックを生で観ることができなかったんですよ。でも今、再び7年後の東京でオリンピックが行われようとしている。すごいことだなって。でも、一方でこれを言ったら怒られてしまいそうですが、私はイスタンブールで開催されるオリンピックも観てみたかった。東京は都市としての快適さや豊かさに対するアピールが強かったでしょう。

近藤：確かに他の候補地に比べて、東京は経済的に余裕があるかもしれない。

ひびの：そう、余裕があると思います。だからたとえば、東京が抱える東日本大震災のこと、原発のことを本気で向き合いながら、もっと大々的に“東北を応援します”という気持ちに立てると良いなって。

近藤：経済発展のためとか、お金のための動きにならないよう、そういう余裕が東京にはちょっとありますよね。オリンピックはスポーツの祭典だけれど、そこに付随する文化的なものの見直しや発展も、この機会にできることがあるはず。それは震災のことも含めて。

ひびの：私もそう思います。実際にはこうして東京に決まったのだから、私自身もそういう視点を持って、自分にできることを考えて、行動していきたい。

原田郁子 (以下、原田)：あの、オリンピックが決まった時、

ちょうどクラムボンのツアー真ただ中で、私、7年後のこととか、全然考えすぎてました (笑)。

近藤：それは逆に面白い! (笑)。

ひびの： (笑)。

原田：うーん、でも今、お二人が話しているのを聞いていて、自分の人生のなかに、大きな地震とオリンピックがあったとしたら、それはすごいことかもしれないなって。

近藤：きっと今から50年後くらいの未来では、2020年は大きな地震を経験して、オリンピックに向けて次第に立ち直っていった日本、みたいな図になるのかな。

原田：例えば戦前、戦中、戦後のことを祖父母に聞いてみたくなるように、「あの頃ってどんな感じだったの?」って、いつか子供たちに聞かれるのかな。そのぐらいの時代を生きているのかもしれないですね。

近藤：震災からオリンピックまで、およそ10年。

原田：10年、恐らくすごい振幅だと思います。良いことも悪いこともたくさん見るんだろうなって。でも想像を超えていて、想像がつかないというか。楽しみでもあります。

近藤：そうやって考えていくと、今できることを小さな単位でも地道にやっていく方が大切だし、その方が楽しそうだね。

何事も、顔が見える小さな単位で。

ひびの：小さな単位の可能性は、昔に比べてすごく広がってきていますよね。今年の夏、森山開次さん、川瀬浩介さんと一緒に取り組んでいる『LIVE BONE』という公演を、東京のスパイラルホールと広島県立美術館で行ったんですね。それで広島県立美術館でやるときに、通常の展示ホールで公演ができるのかなって当たり前のように思っていたら、実際は地下のロビーでお願いしたいという依頼だったんです。それを聞いて、正直戸惑いました。照明、衣装、オブジェをすべてスパイラルホールと同じもので準備して、同じ条件のなかでやりたかったから。だから本当にロビーでできるものなのかと不安でいっぱい。でもやることが決まって行ってみると、運営してくれた方もお客さんもすごく気持ちがあたたかくて、公演は大成功。いい経験でした。もう時代は公演を行うのに、必ずしも劇場やホールで行う必要はなくなってきていると。

近藤：僕もダンスのワークショップをいろんな場所でたくさんやっていますが、やっぱり一回のイベントで終わらずに

Seven years from now: Tokyo and me

7年後の東京、わたしを見つめながら

3回目となる巻頭の東京文化座談会。今回お招きした“客員研究員”は、ひびのこづえさん (コスチューム・アーティスト)、近藤良平さん (ダンサー／振付家)、原田郁子さん (音楽家)。池袋〜目白〜雑司が谷を散策しながら、どこまでものびのびと文化について議論してくれました。

To lead off our third issue, we assembled a team of three “guest researchers” :costume artist Kozue Hibino, dancer and choreographer Ryohei Kondo, and musician Ikuko Harada. While walking around Ikebukuro, Mejiro and Zoshigaya, they had an enlightening, unfettered discussion of culture.



① フランク・ロイド・ライト設計、国の重要文化財でもある自由学園明日館 (豊島区池袋) を訪れる。この日はちょうど結婚式が行われていた。中庭でお三方は、その式の記念撮影会に遭遇。その様子を眺めながら、ゆっくりとした時間が流れる。

継続していくときというのは、現地に必ずひとり、強烈に面白くて熱い人がいるんですよ。ワークショップを絶対にやりたい!って、めちゃくちゃ強い想いを持って。そういう人がひとりいると、そこからいろんなことが広がっていく。

ひびの: 個人の想いが大きな何かを動かしていく時代ですね。——原田さんが活動しているクラムボンでは、お客さんから小さなライブ会場を募って、実際にそこで演奏するというツアーを行っていますよね。

原田: うんと、そうですね。デビュー当時は、大きな都市の大きな会場で、たくさんのスタッフと飛行機や新幹線を使って巡るっていうツアーもやっていたんですね。でも例えば仙台の会場に来てくれるお客さんたちは、電車をいくつも乗り継いで来てくれていたり、泊まりがけで来てくれていたんだってわかってきて。だったら、私たちがその町までライブしに行くにはどうしたらいいだろうって。あとは、福岡の酒蔵でライブしたことで「ライブハウスじゃない場所の音の良さ、独特さ」に気がついた。それでライブ中に「クラムボンを観るならどこがいいですか?」って地元のお客さんから面白い場所を募集するようになって。それが「ドコガイデスカツアー」の発想です。電気さえあれば、音が鳴らせるサウンドシステムと楽器、メンバー、マネージャー、PA、スタッフの最少人数で、ワゴン車1台で全国をまわりながら、洞窟、合掌造り、芝居小屋とか、いろんな場所でライブしています。

ひびの: すごい! それは北海道から沖縄まで?

原田: はい。フェリーで海を渡って。「大変ですよ」って言われるんですけど、「大変」って思えば大変なんでしょうけど、それ以上の充実というか。「誰もやっていないことをやっている」という意味では、開拓民のような気持ちです。

近藤: 原田さんが経験しているそのローカルな、小さな単位の楽しみ方を、東京でももっとしていけたらいいよね。

ひびの: 例えば東京を4つくらいに分けて考えてみても良いかもしれない。ツアーをするにも、地区を分けて回るとかね。

原田: 本当に駅ごとに、北口か南口かでも街の雰囲気が違うし、「東京」って広いです。

ひびの: そうそう。それに東京って文化に恵まれているように見えるんだけど、実は孤独なところがあると思うんです。まず幅広い年齢層を迎え入れる場所がありませんよね。私は昨年から今年にかけて、雑司が谷で、『虫を作るワークショップ』^(※1) というものをやっていたんですね。舞台衣装などに使った布の端切れを使って、参加者は自分がイメー

Ryohei Kondo (Kondo): The Olympics started seeming like a realistic possibility to me about two years ago, when the organizers of the National Sports Festival of Japan asked me to coordinate the opening ceremonies for the 68th tournament, scheduled for 2013. I don't think I'll ever forget that surge of excitement that swept across Japan when they announced that Tokyo was going to host the 2020 festivities. It really hit home for me when I realized that the athletes in the 15-17 age group at the 2013 National Sports Festival could very well be Japan's premiere athletes when the Olympics make their way here in 2020. You know, over the next seven years, all I'm going to be doing is transitioning from my forties to my fifties—but some of these young competitors are going to be making an unbelievable leap from adolescence to the global stage.

Kozue Hibino (Hibino): For me, hearing the word “Olympics” will always make me think of the 1964 Tokyo Olympics. My family moved from Aichi to Shinjuku right after the Games ended, and I remember my new classmates talking about how they'd seen the Olympic rings high in the sky, how they'd heard the cheers for marathon runner Abebe Bikila in person. That was the first time the Olympics had ever seemed real. I never got to actually see the Olympics for myself back in 1964, but the festivities are right on our doorstep again. It's amazing that they'll be right here in Tokyo in just seven short years. I know I'll probably get blasted for saying this, but I would've loved to see the Olympics in Istanbul, too. The Tokyo delegation must have done a great job of showing how comfortable and prosperous the city is. That's why I hope the Olympics give us a chance to really confront the Great East Japan Earthquake & Tsunami issues, concentrate on the whole nuclear power problem, and make real contributions to the recovery efforts in Tohoku.

Kondo: The Olympics may technically be a celebration of sport, but I think the 2020 Games can open up some avenues for reexamining and enhancing the deeper cultural pieces that come along with the festivities. The Great East Japan Earthquake is part of that, I think.

Ikuko Harada (Harada): Wow—I hadn't even started thinking about the Olympics until this very moment.

Kondo: That's pretty impressive, actually! (Laughs)

Harada: I'll have experienced both the Great East Japan Earthquake and the Tokyo Olympics in one lifetime.

Kondo: From the disaster to the Olympics in 10 years—amazing, isn't it?

Harada: The pendulum's swinging big and wide,

Kozue Hibino

Ryohei Kondo

Ikuko Harada

I think. By the time the Olympics start, we'll have run the gamut of experience from extremely trying, difficult times to the opposite extreme of joy and excitement. There are going to be swings over the next seven years, too. I just wonder how I'll perceive it all—how I'll respond to all the changes.

Kondo: If you look at it that way, I think that taking a small-scale, low-key approach to whatever we do is going to be the best way of going forward. It's more fun to keep things grounded and community-focused, anyway.

Hibino: You can do so much more with small-scale performances than you used to be able to. This summer, I worked with Kaiji Moriyama and Kohske Kawase on their “LIVE BONE” shows at Tokyo Spiral Hall and the Hiroshima Prefectural Art Museum. When we were getting ready for the Hiroshima performance, I just assumed that we'd be doing the show in the kind of exhibition hall that we normally performed in. Then I found out that we were supposed to use the underground lobby. When I first heard that, I seriously didn't know what to do. I didn't think there was any way to do it in a little lobby. But when we actually went through with the performance, all the organizers and audience members were so receptive and enthusiastic—and the show was a smash hit. It was an incredible experience, really. Now I know that you don't always need a standard theater or hall space to give a good performance.

Kondo: In my experience giving dance workshops in

↓ 子授け、安産祈願の神社として参詣人を集めてきた鬼子母神堂（豊島区雑司が谷）へ。



ジしたオリジナルの虫のブローチを作り上げるというワークショップなんですけど、毎月、赤ちゃん連れのお母さんから、子供から、おばあちゃんまで、いろんな世代の人が集まってくれたんです。そこでね、みんなお友達になって新しいコミュニティが生まれているのを見て、すごくいいなって思って。だからこの東京でも小さな単位で動くと、実はホットなことが出来る。そう確信して、東京に愛着心が持てました。——集って同じ時間を共有する喜びってありますね。孤独感も和らぐ。オリンピックもダンスもライブも虫のワークショップも、そういう視点で見ると、つながりが見えてきます。

近藤：でもそこで大切なのは、ちょっとした自主性を持つことなんです。やらされているのではなく、やりたい人がやる。

ひびの：原田さんが以前、両国国技館でライブをされた時に、白いTシャツを着てくることをドレスコードにされた話を聞きました。みんなクラムボンの同じTシャツではなく、白のTシャツというところがすごくいいなって。それこそちょっとした自主性があるでしょう。

原田：2011年の国技館ですね。実際、どのくらい着てきてくれるのか、着てこなかった人たちは疎外感を持たないだろうとか、本番がはじまるまでわからなかったんですけど。震災があって、なんとかツアーをまわって、ライブができるっていうこと、人が集まるってことが、それだけで尊いことだと。それで、しばらく歌えなかった『波よせて』という曲を演ったんですけど。360度、真っ白白いお客さんたちと、ステージの私たちと、全体が照明で青く染まったんですね。その瞬間を思い出すと今でも涙が出そうになるんですけど、ほんとに息をのむような、海の底にいるような光景でした。

ひびの：人の心と身体の動きに、服の存在が作用していますね。やっぱり私は服を作る人間なので、感動してしまいます。

原田：嬉しいです。あの時期、ライブから受け取ったものは大きかった。「私たちには、音楽がある」ってバカみたいに腹をくくれた。ダンスがうまい人だけの踊りじゃなくて、歌がうまい人だけの歌じゃなくて。ただ一緒に音のなかで身体を揺らしたり、声を出したり、笑ったりできる。個々が集

まったときのグルーヴみたいなものを、感じたように思います。

近藤：それは全く同感。舞台上では観る側と演者が分かれるけど、例えば僕が盆踊りをしでかす^(※2)ってというのは、もうすでに観る側と演者の距離感なんてなくて、純粹に「僕も踊るけどあなたも踊るよね？」っていうことだけ。だから一歩動き出せば、個々の踊りは僕には止められないんですよ。踊りは劇場から飛び出していくし、美術品ですらみんな美術館から外に出る時代。

ひびの：そうそう。今までは大都市集中で、何かを観るためには大きな街に行かなければならなかったけど、今は各々の場所でしか作れない、または観られない時代になってきた。

原田：そうですね。移動しながら、発信したり受信したり。

近藤：面白いのは、『ルンバ』ってあるでしょう。

ひびの：ダンスのルンバではなく？ えっ掃除機？（笑）。

近藤：『ルンバ』って勝手に部屋を動き回って掃除してくれるでしょう。でもね、そんな『ルンバ』もドアが空いていると勝手に部屋を出ていっちゃうらしい（笑）。今はルンバも外に出て、旅する時代。だから外に出よう、動いていこう。一同笑

※1 プンブロが取り組んでいる事業「東京アートポイント計画」プロジェクトのひとつでもある。

※2 近藤良平・コンドルズが、2009年より池袋の街を舞台に行っている『にゅ〜盆踊り』大会を指す。

📖 研究結果のまとめ

プンブロが取り組む事業に『東京アートポイント計画』がある。互いの顔が見える地域を舞台に、そこに住む人や集う人とアーティストが協力しながら各々の地域文化を育んでいこうという仕組みだ。オリンピックのような大イベントに対峙するとき、個人の想いや、小さな関係性から生まれる活動はなかなか見えにくいかもしれない。しかし、どんなに大きな催しも、個人の想いの積み重ねでできていることを忘れてはいけない。小さな楽しみを凝縮していく7年間で、オリンピックをあなたのものにする。



原田郁子 Ikuko Harada

1975年福岡生まれ。1995年「クラムボン」を結成し、歌と鍵盤を担当。並行してソロ活動も行う。2010年からは、多目的複合スペース「キチム」（吉祥寺）を企画運営している。最新作に、原田郁子 & ウィスット・ボンニミット『Baan』がある。

Born in Fukuoka in 1975, Ikuko Harada formed “Clammbon” in 1995 as the group’s keyboardist and singer. Besides playing with the band, Harada has also performed extensively as a solo artist and run “Kichimu”, a multipurpose space in Kichijoji, since 2010. Her latest release is *Baan*, a collaborative effort with Wisut Ponnimit.

近藤良平 Ryohei Kondo

1968年東京生まれ。ペルー、チリ、アルゼンチン育ち。学ランを着用する男性だけのダンス集団コンドルズ主宰。北米、中南米をはじめ海外公演ツアーも行う。また、テレビやミュージシャンのPVなどで振付家として活動する傍ら、横浜国立大学等の非常勤講師も務める。

Born in Tokyo in 1968, As the leader of Condors, an all-male dance company Ryohei Kondo has toured North, Central, and South America as well as many other locations throughout the world. When he’s not dancing or choreographing routines for TV shows and music videos, Kondo also teaches classes at Yokohama National University.

ひびのこづえ Kozue Hibino

1958年静岡生まれ。コスチューム・アーティストとして、広告、演劇、ダンス、バレエ、映画、テレビなど、その発表の場は、多岐に渡る。NHK Eテレ「にほんごであそぼ」衣装セットを担当中。展覧会多数。1997年作家名を内藤こづえより改める。

Born in Shizuoka in 1958, costume artist Kozue Hibino has an impressive repertoire that extends into areas as diverse as advertising, theatrical productions, dance, ballet, film, and TV. In charge of “Fun with Japanese” costume set being broadcast in NHK. In 1997, she changed her artist name from Kozue Naito to Kozue Hibino.



3号目ともなると、そろそろ定着した感があるでしょうか？ 客員研究員の証、それはこのロゼットです！

various places, one of the things I’ve learned through doing multi-event series is that wherever you go, there’s always one participant who’s just so into the whole idea, someone who’s got that fire in his eyes. You don’t forget those kinds of people.

-- Ikuko, you and Clammbon do tours where you play at venues suggested by fans.

Harada: We pile the band, our PA, our manager, our instruments, and all our other equipment into a van and head out to places our fans have told us about. That’s the basic concept. As long as we’ve got a power source, we can kind of turn any venue into our own unique space for a night. A brewery, a steep-thatched-roof house, an important cultural property, you name it—we’ve played at some pretty off-the-wall places.

Kondo: It would be so cool if we could get more of that local, small-scale feel in Tokyo.

Harada: That could work. I think every single station in Tokyo—maybe even every single station exit—has its own special vibe.

Hibino: Tokyo seems like it’s full of so much culture all the time, but I think there are actually quite a few places that are pretty isolated. There aren’t many areas that offer something to people of all ages, for example. Last year, I did a “Workshop to create insects” in Zoshigaya. The thing that really amazed me was that every month, we had participants from so many different generations. Watching them make friends with each other and form their own little community, I was amazed. This is what it’s all about, I thought. That’s why I think Tokyo can really be a vibrant, exciting scene if you focus on smaller-scale projects.

----There’s a unique joy that comes from being part of a tight community, a feeling that can even break down those walls of isolation.

Kondo: I agree completely. The important thing is initiative, though—the only way to really cultivate that community-driven spirit is if the people involved are doing it because they really want to.

Hibino: Ikuko, I heard that you made white T-shirts the dress code for one of your lives at the Ryogoku Kokugikan. I thought it was so cool that you had your fans wear plain white shirts instead of Clammbon shirts. That takes some initiative, if you ask me!

Harada: It is Kokugikan in 2011. That was the year of the big earthquake and tsunami, of course, so we were so aware of how precious it was to be able to go on a tour and play music in front of people. For that live, we decided to play a song called “Nami Yosete” [Surging Waves], which we hadn’t been able to bring ourselves to sing for a while, and there was a moment when the 360-degree view of all those white shirts in the audience, as well as we on the stage, were turned into a sea of glowing blue by the lighting. It was a breathtaking view, and I felt like I was under the sea.

Hibino: Clothes have that kind of effect on how people move and feel, I think. As a clothing designer, I’m always impressed to witness that transformative power.

Harada: Those that time, received from live was great. The dance, not only of people good at dance, song, not only of people can sing. Everybody can rock themselves, sing and laugh together to the music. We felt a groove produced when individuals got together.

Kondo: I’m with you there. When you’re on stage, there’s this sense of separation between the performers and the audience. But when you start getting into things like Bon Odori, there’s none of that distance between the two sides; it’s like, “I’m dancing, get in line behind me!” That kind of closeness, that communal connection, is changing the way art behaves: dance is coming off the stage, and even fine art is escaping the confines of museums.

Hibino: Right. You used to have to go to certain cities to see the culture there, but now it’s the opposite; you have to go to a lot of different places to see things that are special to each location. We’ve entered a time full of motion, one where people need to venture out in search of those unique local flavors.

Harada: That’s right. While moving, you can receive or outgoing.